立命館大学
日本文学会ニュース No. 27
「論究日本文学」第46号 付録 1983.5

# 情報技術化の波

伴 利昭

技術進歩の著しさについては、近時よく耳にするところであるが、コンピュータの仕組などまるで理解できぬ私などは、余所事と聞き流してきた。せいぜい、複写機の性能がよくなったとか、印刷技術がよくなったとか思う程度の受け止め方にすぎなかった。ところが最近は、国書・資料のデータバンクとして情報を売る会社の宣伝案内が届くようになるし、立命図書館でもコンピュータ利用の情報処理とオンライン化システムの研究に着手しているという。文学の研究など、技術革新とは最も縁遠い存在と思っていたが、時代の波は足下に寄せはじめているというべきか。

本学では、演習などの小集団学習に一クラス三万円の補助金が支給され、主として発表の補助資料費に充てられる。複写機も用意されているので学生は存分に資料を準備できる。中には、三十分程の発表に十枚を越す資料を用意する者もある。一、二週間によくぞ調べあげたと感心するのだが、感心ついでに質問をすると、自分の書いた資料本文すら読めない場合がある。資料集成などの類を手軽に利用し、コピーしただけという不心得者もいる。これでは利便に振り回されて、肝心要を忘れている。

岩崎美隆はあまり知られぬ幕末の国学者であるが、彼の著述は出版されぬまま、関西大学図書館に岩崎美隆文庫として収蔵せられている。『藤門随筆稿』は三十五の事項を考証した小著であるが、そのもととなった手控が『藤門雑記』として遺されている。抜き書き、手控等の多い文字通りの雑記であるが、百二十一冊という分量と、学問は「千万の書みるほどのかたへのわざなり」として諸書を博捜する努力の跡に圧倒されてしまう。かつてはこれが普通のことだったろう。あるいは、今からすれば無駄に近い労力も多く含まれているかも知れない。それにも拘らず、心打つ迫力を感ぜずにいられない。この冊子を前にして、便利づくめの波打寄せる日頃を自戒せずにいられぬことであった。